

アクティブ・ラーニングに向けた高校の実践からの提案

情報モラルを論題にしたディベート学習

帝京大学大学院教職研究科 荒巻恵子

要旨 文部科学省(2012)は、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称としてアクティブ・ラーニングを定義し、高等教育の学部学生を対象とした新しい学習形態に期待している。従来の講義型と違い、ディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育が求められている。そこでディスカッション、ディベートといった高校情報科の授業実践から、アクティブ・ラーニングに向けた提案をする。

1. アクティブ・ラーニングとは

日本の高等教育はユニバーサル段階になり、量的規模から質的保证に段階にあり(文部科学省2012)、各大学は知識基盤社会、グローバル社会に対応する学士力向上に向け、体系的なカリキュラムの編成や学生が予習するための工程表としての授業計画(シラバス)などを行っている。その中で、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークなどによる課題解決型の能動的学修(アクティブ・ラーニング)に取組み、成果をあげる大学も出ており、従来の講義型ではない、アクティブ・ラーニングが注目されている。文部科学省の定義では、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称であり、学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれる」としている。河合塾(2012)の調査によれば、アクティブ・ラーニングの学習形態では、グループ活動、フィールドワーク、ディベート、プレゼンテーション、振り返り、時間外学習などがあり、初年次ゼミでグループワークからプレゼンテーションの活動が多く見られる。アクティブ・ラーニングは、活動がアクティブということだけでなく、学習内容が重要である。これらのうちグループワーク、プレゼンテーション、ディベートなどの活動は、高校情報科でも多く実践がある学習形態である(荒巻ら2013、八百幸ら2014印刷中)。そこで、本研究では、アクティブ・ラーニングの学習形態のうちディベート学習の授業について学習内容、評価法について整理する。さらに、アクティブ・ラーニングに向けたクリッカーを使用した動的形成的評価について、提案する。

2. ディベート学習授業

2.1 授業の内容

2.1.1 対象とグループ分け

対象校は商業科が併設される公立高校で、情報科科目は1年次に「社会と情報」「情報処理」、それぞれ2単位(週2時間)の履修をする。1年次の2学期には、全員が表計算および編集ソフトの検定資格を取得することが学習目標になっている(検定合格率90%、2013年度実績)。対象クラスは、1年A組(26名)B組(25名)C組(26名)である。各クラス、4~5人のグループ編成をし、6グループに分かれる。グループ内でリーダーを決め、リーダーはディベートに向けたグループワークを統括する。

2.1.2 指導計画

教科「社会と情報」単元「情報社会の課題を見つける」でディベート学習を取り入れた授業を行う(表1)。全4回の授業(50分授業)を行い、第1回はディベート学習のガイダンスを最初に説明した後、グループ活動を行う。第2回はグループ活動により、ディベートの発表資料を作成する。第3回・第4回はディベートを行う。論題は生徒たちの日ごろの情報モラルの実態と現在のトピックとなる課題から3つの論題を設定し、論題に対する肯定側、否定側の選定は生徒たち自身で決める。ディベートは、表1のとおりで、3つの論題に対して実施し、進行係、タイムキーパーは発表以外のグループリーダーが担当する。

2.2 学習評価

ディベートにおける評価は、立論、質問、資料、態度・総合印象の4観点を5段階で評価し、ディベート終了後、観衆の生徒が評価票を用いて評価し、合計点で判定する。経過中の学習活動を即時に行う動的形成的評価(Shavelson and SEAL 2003)を、クリッカーを利用し結果が瞬時に見えるようにする。

表1 ディベート学習の指導略案

	第1回	第2回	第3・4回																
導入	<ul style="list-style-type: none"> ディベート学習のガイダンス グループ分け 論題の選定 	<ul style="list-style-type: none"> グループ内でのここまでの作業進捗の確認。 本日の作業遂行の見通し。 	<ul style="list-style-type: none"> ディベート発表の進行の説明 ディベート評価の説明 																
展開	グループワーク① <ul style="list-style-type: none"> 論題に対するグループ内での検討。 立論のためのグループ内での意見の整理。 反駁のためのグループ内での意見の整理。 ディベートのための調査項目の分担。 	グループワーク② <ul style="list-style-type: none"> ディベートのための調査結果の確認。 資料づくりのための作業の分担。 	[論題] 学校の連絡網に LINE を使うこと。																
			論題1 20分 <table border="1"> <tr> <th>時間</th> <th>進行</th> </tr> <tr> <td>3分</td> <td>肯定側立論</td> </tr> <tr> <td>3分</td> <td>否定側立論</td> </tr> <tr> <td>1分</td> <td>作戦タイム</td> </tr> <tr> <td>4分</td> <td>否定側質問</td> </tr> <tr> <td>1分</td> <td>作戦タイム</td> </tr> <tr> <td>4分</td> <td>肯定側質問</td> </tr> <tr> <td>4分</td> <td>判定・講評</td> </tr> </table>	時間	進行	3分	肯定側立論	3分	否定側立論	1分	作戦タイム	4分	否定側質問	1分	作戦タイム	4分	肯定側質問	4分	判定・講評
			時間	進行															
3分	肯定側立論																		
3分	否定側立論																		
1分	作戦タイム																		
4分	否定側質問																		
1分	作戦タイム																		
4分	肯定側質問																		
4分	判定・講評																		
論題2 [論題] ゲームサイトの掲示板で知り合った高校1年生に会いに行くこと。																			
論題3 [論題] ゲームサイトの掲示板で知り合った高校1年生に会いに行くこと。																			
総認	<ul style="list-style-type: none"> 次回までの見通しと宿題の確認 	<ul style="list-style-type: none"> 発表までの見通しと宿題の確認 	<ul style="list-style-type: none"> 講評 																

3. まとめ

従来、高校情報科ではグループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションなど、様々な学習形態による学習活動を実践してきた。高校情報科の場合、必修2 単位履修の50分授業であること、生徒数が25名から50名のクラス編成であることなど、高等教育とはクラス構成やカリキュラムに違いはあるが、平成25年の新しい学習指導要領でも、「社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育てる」ことを教科目標に掲げているように、アクティブ・ラーニングで求められる学士力と同様の能力の育成を行ってきた。ここでは、高校情報科での実践を発信することにより、ボトムアップする形で高等教育へのアクティブ・ラーニングへの橋渡しや高大の連携も視野に入れて、生徒たちの能動的な学習の在り方を探っていくことが大切であろう。また、クリッカーなどを利用した学習評価への新しい取り組みなど、高校情報科でもアクティブ・ラーニングの意義を問いながら授業実践研究を進めていく必要がある、高校情報科に期待されることでもありと考える。

参考文献

- (1) 文部科学省、大学教育部会の審議のまとめについて(素案)、大学教育部会(2012)
- (2) 河合塾、大学の教育力を見る「大学のアクティブラーニング調査2012」プロジェクトー学生の能動的な学習を促す授業の取り組み・カリキュラム設計ー、(2013)
- (3) 荒巻恵子・橘孝博・鶴田利郎・金田千恵子、CSCLを活用した体験型情報倫理教育の授業実践モデルの開発 - 著作権授業でのBBSとチャットを活用したディスカッション場面 -, 2013PC Conference 論文集(2013)
- (4) 八百幸大・荒巻恵子・石塚忠男・金田千恵子・斎藤翔一郎・武沢護・橘孝博・鶴田利郎、CSCLを活用した体験型情報倫理教育の授業実践モデルの開発II - 著作権授業での問題解決型学習の取り組み -, 2014PC Conference 印刷中(2014)
- (5) Shavelson, R.J. and SEAL, On the integration of formative assessment in teaching and learning with implications for teacher education, (2003)